

があつたが、成程黒人側の説としては着實な説で尤もであるが、是れは其内に居て内を評する説で、局外者が他を見て評するのは、恰も下戸が菓子店の良否を定めるも、上戸が酒の善惡を評するも同じことで、必ず其實業者で無ければ言はれぬ譯のものでない、黒人は公然と之を評しこそせね、内間の評は随分やるので、嘗て或人が、寶生九郎は甘いものであるが、肩が凝つて藝に角があるといふた時、森田登記が側に居て、九郎の藝に角が取れたら、それこそ誠の名人でせうと言ふたことがあつたが、其當時通人社會での評に、實の藝は圓いが其裏に纖弱な所があり、九郎の藝には力があつて強いが角が立つて居る、伴馬は上京當時は、早業を以て名を擧げ、活動的演舞に長じて居たが、追々東京に慣れ、九郎や實の藝を見て工風する所があると見え、其方圓の間に逡巡して、近頃では大ひに趣きが違つて來たなどいふ評があつたので、一日櫻間が宅へ來た時に此の問題を提出して果して然るか尋た所、櫻間はそこでござる、其の圓い方いと申す分れ目が大切でと、さあそれから藝術の難かし所を述べ立てたことは珍らしき氣焔で、知らず識らず葡萄酒の一瓶を夷けてしまふたことがあつた、九郎對實の方圓論などは、明治能樂界の評としては最も高い所の評であらうが、當否は暫く措き參觀者側からの評を聞いて參考とすることは演者に取りては必要なことであらう。

近頃に至つても、新聞の記事に付き能役者の側に時々苦情が持上ることがある様であるが、個様の事は成可心を寛く持て廣く聞き。能樂上の記事が新聞紙の上に多く載る様にするのが能樂の發達の爲めには必要なことである。

所謂腹藝

婦人の眼も油斷がならぬ

古市公威

前月の同氣俱樂部の望月かね、囃子の方は無事であつたが、我輩は被つた衣を頭から外して着る時に左の手を袖へ通すのが引掛つて大困りに困つた、此日の衣は萬三郎が、是れは白頭にも赤頭にても使へる色合で相の子もですといふたが、却々面白い柄であつた、其の衣が輕いので反つて扱ひ難い、我々如きものには重いもの、方が都合が良い様である、併し後見人の注意で其失策も早速に直り、先づ無事に済んだ、一つ自慢話をやると、彼の橋掛の手摺へ足を掛ける時の形は、嘗て實から注意されたことがあつて、聊か習練を重ねて居るのであるが、其効があつたか、當日參觀して居た或婦人が是れを見て、あの足を手摺へ掛けた時には十分に指の尖迄に力が入つて居るのが見えたと言ふたといふことを聞いた、なんと油斷がならぬではないか、橋掛りから出て被つて居る衣を上げ、脇を見込んで足を掛けるのであるから、誰しも上の方に目が付いて足元などには氣が付かぬ筈であるに、此場合其足の先迄に氣が付いたといふのは、却々侮る可らざることである。

二月四日の井伊邸のお催で我輩は急に田村を演ることになつた、田村なら珍らしく長床机といふて、切の有難しありがたしやの所迄床机に掛つた儘で演るので、所謂腹藝で難かしいのである、個様なとは我々如き未熟者には不似合なことで、定めて見物から非難も受けることであらうが、元來我輩な

どは唯自分の娛樂に演るので、他の批評には無頓着だから、師匠が許す上は何でも我が演りたいものを演るのである、元來形は謠の文句に伴れ、景趣と我が意中表示するもので、角を取つて廻るなどいふことは甚だ無意味であるから、我が力量さえあらば、座つて居らうが、起つて居らうか、其作用を顯すことは出来る筈である、是れも稽古をすれば少しは巧くなるかも知れぬが、近來頗る忙しいので、一度萬三郎に見て貰ふ間合もない、古く實のを見て置いたのを、車に乗つて走らして居る間に、少しづつ工風する位だから巧く出来様筈はない。

嘗て金剛蓮之助の話を、實は鍾馗の黒頭を勤めた時、彼の中入前の「傳聞佛在世の」の地が普通の鍾馗の様に突掛けて謠ひ出したのを、足拍子で締めて付けて地の位を鎮めさせたことがあつたが、實に豪いものだといふて頻りに賞賛したことがあつた、我輩も嘗て實が、合甫の一拍子といふを勤めたのを見たことがあつたが、元來合甫といふ能は、能く子供の勤めるもので極めて軽い能であるが、一拍子となると、頗る澁いものとなつて、戀の重荷を見る様に思はれた、同じ能でも、演者と演り方によると見違へる様に變つて来る、力さえあらばどちらでも面白い、所謂腹藝といふのが其所で、腹藝の成功不成功は要するに其力量の如何によるのである、力量の足らぬ我輩の腹藝は本より不成功は當然であるが、珍らしいことの演つて見たくなるのも道樂の止を得ぬ所である。

狂言の前途

茂山忠三郎

狂言が次第／＼にその特色を失つて、昔の様な味ふべさ所、風情の掬すべき所が亡くなつて、何やら品が落ちて参りました事は前にも一寸申し上げましたが、一つは當節の世の中の有様から、己びを得ず、今日の様な工合になるのでも御座いませうな。

假令て見ますれば「邯鄲」の宿屋の主人の様な狂言は唯最初に枕を持つて出て、その枕の奇特を語り、シテの廬生に貸したまひ、その後夢の覺る迄は物一つ申さずに唯舞臺に座つて居ります、計りてすが、彼處が狂言の最も骨の折れます所で、御覽になる方々から見れば、何も唯ホッネンと座つて居るには及ぶまい、却つて邪魔だから引つ込んで居たら可からうと思召すかも知れませんが、其處はあの里の宿屋のあるじといふので然うはなりません、曲が終るのを待つて枕を持つて入るといふ所て初めて生きて参ると申すもので、所が御覽になる方の然ういふ心と、一方當節の若い狂言方の成るべくなら座つて居らぬ方が好い、座つて居る位骨の折れる事はないといふ様な兩方の考が自然に一致しまして、漸々昔の面白味が失せて参り氣の利いた風になるのだと存じます、これはまあ一例で、恚ういふ事になつて了つたと申す譯では御座いせんが……

「道成寺」のに致しまして同じ事、飛んだり踊つたりするのなら何の苦勞も御座いせんがジツとして居るものだけに一通りならぬ、苦心のあります所で、私共ですら此様な有様ですから、追々時代